

<書評>上野芳久著 『北村透谷「蓬莱曲」考』

堀江, 泰紹

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

40

(開始ページ / Start Page)

84

(終了ページ / End Page)

85

(発行年 / Year)

1989-02-25

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019573>

出会いや交流が綴られている。そして、そこで繰りひろげられる思想や人間のドラマは、実際に内部に立ち入った人間でしか窺い知れない微妙な部分にまでとうぜん及んでいる。

これについては、戦後まもなく中野重治と『近代文学』同人の荒正人、平野謙の間でたかかわされた『政治と文学』論争が特に印象深い。実際に論争に参加した当事者として著者は書いているのだが、この論争の前提となっている『近代文学』への日本共産党の鬱積した不満、特に『第二の青春』や『民衆とはたれか』の荒、『ひとつの反措定』の平野に対する党員の不満や憎悪をとりあげ、そういった党の意向を代表するかたちで攻撃を開始した中野重治への驚きを述べている。そして、著者はその中野の背後に宮本顕治の存在があったのではないかと推理する。「ふつうなら、中野がこんなすじの通らぬ論難をするはずがないのだ。かれほどの男が、だれかにつかれて本心ではないことをしてしまふなどということは、まさにふつうならありえないのだが、中野の宮本にたいする関係でだけはそういうことが十分に起りえた」——戦争中、獄中で非転向を貫いた宮本顕治に対する

中野の絶対的な信愛によるものと考えれば、十分それは起りえたという。そこから、政治家として文学運動をウラから意のままに動かそうとする宮本顕治の、文学に対する『反文学的』な執着、野心について語ったうえで、論争の具体的な内容へはいつていく。

同様に、ここには『政治と文学』論争の対立者の狭間に立ち、『近代文学』同人脱退にまで至らねばならなかった著者のいきさつも明らかにされており、さまざまな意味で興味深い箇所である。そのほかでは、新日本文学会第十一回大会（一九六四年四月）での本多秋五の発言場面が、圧巻であった。

上野芳久著

『北村透谷「蓬萊曲」考』

堀江泰紹

著者上野芳久氏は詩人であるという。著者は「ある時、実作を深めていく過程で、透谷が急に接近して見えてきた。」ととりわけ『蓬萊曲』との出会いは衝撃的なものであったという。

本書が、混迷する一九八〇年代の文学状況へ投げつけたその問題の意味するものは、予想以上に大きい。そしてそれと現代との間に生ずる亀裂はさらに深刻である。戦後の理念の破産や『政治と文学』の終焉論が陽気な顔つきで言い交わされ、時代や社会や思想といったものが文学作品から意図的に捨棄されていく現代文学の状況は、逆にその亀裂の深さ、深刻さにおいて、根本的に問い直される時期にきているのではないだろうか。本書の存在はなによりもそのことを強烈に示唆している。（集英社刊 定価上下各三八〇〇円）（大学院修士課程二年）

そこでこの著作をものすることになったところが「あとがき」に詳しく記されている。本書はいわば著者の「実作ノート」でもあったのである。著者はこの『蓬萊曲考』を執筆しながら北村透谷像に肉迫を試みたわけだが、

それは半ば以上の成果をあげていると思われる。

大阪事件発覚まえ、友人の大矢正夫から政治資金を捻出するために強盗の謀議を打ち明けられた時の北村透谷の狼狽はおそらくわれわれの想像の域を超えるものであったにちがいない。かれはこの一件で民権運動から身をしりぞくことになるわけだが、著者は文学に転向した透谷について、透谷にとって△政治▽はまだ△表現▽ではなかった、と書く。そして政治運動からの離脱は、透谷をして内部からの争闘を深め、「想世界」に潜行してゆくことにあるのである。

かれの傑作劇詩『蓬萊曲』の設定は謡曲を下敷にしてつくられている。登場人物たちは暗黒の闇から立ち現われてきた△幻像▽たちである、と著者は書く。そして、この劇詩の設定は、透谷十五歳の時、富士登山を決定した時の幽気に満ちた感動体験が基礎になっているという。また「蓬萊山」そのものは、透谷内部の山嶽でもあるのである。

透谷の場合、△自然▽に対する親和と異和はつねに波打って交互におとずれるという。「蓬萊曲」においては、怨みゆえに甦ってく

る△霊▽の悲憤といった心情に透谷の現在が重なりあわされていったものと考えられる。

透谷の精神の△鏡▽にうつるものは「過ぎこし方のみ明らかに、行手は悲し暗の暗」となって見えない、と述べられている。

情況的であるとは、その奥の△空洞▽を見ぬくことである。透谷はつねにその△空洞▽に眼を向けていた、と著者は考える。そして自己そのものの△空洞▽の対象化に向う眼差しが深い、とも喝破する。

『蓬萊曲』が、幻の女人、「露姫」を追うという構成のモチーフには、透谷の最後の希望が内包されていたのではないか。そして、実生活上においてはキリスト者の石坂ミナとの邂逅が透谷を死から呼び戻させて生きのびさせたことになる。

つまり透谷には△仮死▽の体験があるのである。これはとりもなおさず、民権運動からの離脱がそれである。透谷はトラヴェラーと仇名されていたという。

透谷はミナを得て、キリスト教の信による△神▽という観念への目覚めがかれにおとずれてくる。

『蓬萊曲』のもう一つのモチーフに、牢獄

をどのように打ち崩していくか、があっだ。

この劇詩から透谷の意志を垣間見ると、「牢獄」の内の魔性、そのいまだ視えざるものを思念の眼前にみすえ、内なる壁（内なる空洞）、そして情況の壁（対象世界の空洞）をくだき、はらいつつ、なお冥暗の淵に下降していく、その衝迫をたずさえているのである。

劇詩の中の「空中の声」は、のちに「大魔王」として姿をあらわしてくる。

ここで透谷の下降領域を考えるに、三点が指摘できる。まず反近代主義、二番目は反自然主義、そして三番目は友現実主義である。著者は次のようにも書いている。

「蓬萊山に眺められる暗雲、その『雲の中』へ突入をはかり、鬼神の投影『空中の声』を呼びおこし、虚界ともいうべき山頂そして谷へと出向く道行きには、明治絶対主義という暗雲の趨勢、その向こうへ出むく絶対自由への超出が渴望されていた。」

（白地社刊本文二〇頁、定価一八〇〇円）

（一九六二年卒）